



Republika Slovenija



アルプスの麓のヤスナ湖

自然の宝庫スロベニア共和国 ——橋口卓也



リュブリャナ市内の市場



リュブリャナ大学本部校舎

今年3月末までの1年間、中欧に位置するスロベニア共和国のリュブリャナ大学に留学する機会をいただきました。スロベニアは人口200万、面積が四国と同じくらいという小さな国ですが、イタリア、オーストリア、ハンガリー、クロアチアという民族的に異なる諸国に囲まれ、多様な文化が育まれています。公用語はスロベニア語ですが、多くの山や谷、河川で隔てられた各地域には、それぞれの方言があり、その数200とも言われます。文化人が尊敬を集め、ユーゴ導入前のお札のデザインは作家、詩人、画家、作曲家、建築家などでした。

スロベニアは、かつて旧ユーゴスラビア連邦の一国であり、1991年の連邦からの離脱・独立の際には、比較的小規模な衝突が10日間ほど続きました。しかしその後、2004年EU加盟、2007年ユーロ導入、同年シェンゲン条約発効、2010年OECD加盟というように、資本主義化する旧社会主義諸国の中の「優等生」的な道を順調に歩んできました。

心を持ってきました。スロベニアは国土の70%が山林ということもあり、多くの条件不利地域を抱え、日本と近似性があります。そのような地形的な制約もあって、農業の平均経営規模は小さく、このような点も日本と共通性が高いと言えます。EU加盟後の政策の変化と、農業や農村へ与えた影響を学ぶことが大きなテーマでした。確かに政策や経済環境の変化は大きいものの、依然として小規模な農業経営が生き残り、良好な農村空間が保全されているというのが大局的な印象でした。

首都リュブリャナの人口は26万と、日本の多くの県庁所在地よりも小さく、全土に小都市が分散しています。都市の人口吸引力の弱さが、逆に農村部の定住条件の良さを生んでいるようです。また、旧ユーゴスラビア時代から、スロベニアが独自の条件不利地域政策を採用していたことも関係がありそうです。このような点は、現地で築いた関係を活かして、研究を深めたいと考えています。

小ウイーンとも称される瀟洒な



Takuya Hashiguchi profile

農学部食料環境政策学科専任講師
農業政策論研究室担当

1968年 鹿児島県出身
東京大学大学院農学研究科博士課程中途退学、東京大学大学院助手、財団法人農政調査委員会研究員を経て、2005年より現職

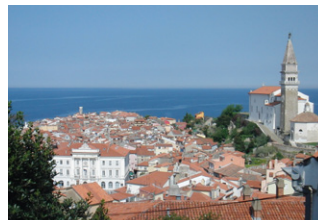
【主な著書】
『条件不利地域の農業と政策』（2008年、農林統計協会）、『中山間地域の共生農業システム』（共著、2006年、農林統計協会）

EU加盟時点での経済水準は、ギリシャやポルトガルを上回っていたとされています。もともと、旧ユーゴスラビア時代からソ連と異なる「自主管理制度」を標榜する自主独立路線を歩み、とりわけ西欧に近かったスロベニアでは、経済体制の移行は「軟着陸」であり、変化は他の社会主義国と比べ穏やかであったように思われます。

生活は至つてのどかで、朝が早いこともあって、午後4時ともなれば大学からは一斉に人影が消えます。休日はハイキングやサイクリングに各種スポーツ、そしてガ

ーデニング、冬はスキーというのが人々の楽しみです。小さい国ゆえ人間関係も濃密で、思わぬところで知人と出くわしたり、友人がテレビや新聞に登場したりすることもしばしばです。私自身も国営ラジオに出演する機会がありました。また、博士論文の最終審査会に立ち会った際に、家族や親族が大勢集まり、深夜まで祝宴が続くのは驚かされたということもありました。

私の専門は農業政策論ですが、近年、農業の生産条件の厳しい条件不利地域への政策のあり方に関



海辺の町ピラン



山岳地域の酪農風景

街並みのリュブリャナの中心部からでも、車で10分、あるいは鉄道だと2〜3駅も過ぎると、のどかな田園風景が広がります。「アルプスの瞳」と称されるブレッド湖、クラス地方（カルスト地形の名前の由来は、この地域にあります）にあるヨーロッパの規模を誇るポストイナ鍾乳洞や世界遺産のシユコツイヤン鍾乳洞、オレンジ色の瓦屋根とエメラルドブルーの海との対照が美しい海辺の町ピラン、など多くの観光地があります。日本ではまだまだ知られていないスロベニアですが、他にも、各地に点在する素朴な農家民宿や、家族経営のワイナリー、温泉など魅力が凝縮されています。



同僚教員のホームワイナリー